

## 所蔵品紹介 ～岡山旭焼～

当館の所蔵品は一定の基準に基づいて蒐集された学術的・系統的コレクションとは性格が異なるが、当時の生活で使用していたものが散逸することなく伝わっている希少なコレクションであると思われる。書画・陶磁器・漆器などの什器は、野崎家に逗留した人物や地元ゆかりの作品、京都の職人による作品が比較的多く伝わっていると思われる。

このたび館蔵資料のうち「岡山の旭焼」についてご紹介する。江戸時代より発展してきた各藩の陶磁器製造は、明治維新で藩の保護や援助が受けられなくなると、衰退する製造地があらわれた。そこで明治政府は、殖産興業や輸出振興を図り、内国勸業博覧会の開催や海外の万国博覧会へ参加した。これにより慶応3年（1867）のパリ万博や明治6年（1873）のウィーン万博で鹿児島 の薩摩焼が高い評価を得て、陶磁器ブランド「SATSUMA」として国際的に受け入れられた。このため鹿児島のみならず、京都の錦光山、大阪の藪明山、横浜の宮川香山らによって、薩摩焼風の金襴錦手が製造され海外へ輸出された。鹿児島で製造された薩摩焼は本薩摩と呼ばれるが、そ



薩摩焼（12代沈寿官）当館蔵

の他は産地により、それぞれ京薩摩・大阪薩摩・横浜薩摩と呼ばれている。

明治初期の岡山権令・石部誠中（山口県出身）は、政府による地租改正の強行と農民の反対運動との板挟みとなり辞職願を提出した。そのため内務卿の大久保利通（鹿児島県出身）が県令として送り込んだのが元薩摩藩士の高崎五六であり、これには薩摩閥の強力な繋がりが垣間見える。

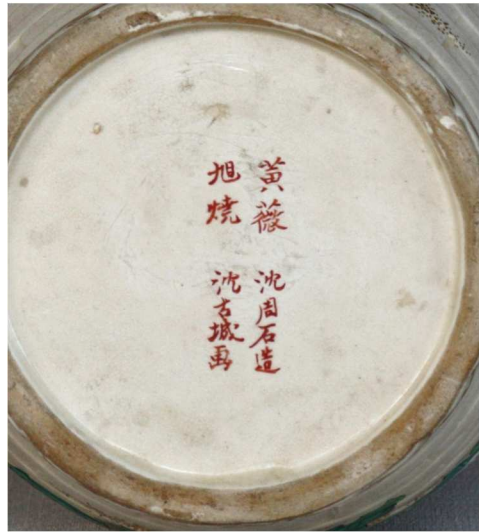
明治9年（1876）、岡山県令高崎は、岡山薩摩とも呼べる「旭焼」の製造に取り組んでいる。高崎は旧小田県より引き継いだ勸業無名金約 8,000 円を活用し、鹿児島から薩摩焼の陶工である沈周石と沈古城ほか数名、京都から画工 3 名を招聘した。そして、岡山在住の士族約 30 名を伝習生として入所させ、翌年に県営天瀬陶器製造所を開業した。原料の白土は、和気郡八木山村（現在の岡山県備前市）などから運び、販売所を横浜境町と神戸栄町に設け、主として海外輸出を目的としていた。これは高崎が海外で人気があった薩摩焼を岡山の産業として発展させ、士族授産と殖産興業を推進しようとする意図があったと思われる。

その後、旭焼の天瀬製陶所は、敷地内に工業学校を設置して、士族やその子弟に製陶技術を習得させ、製陶に従事する者は約 100 名を数えた。明治 16 年（1883）には岡山士族約 70 名に払い下げて民営となったが、徐々に薩摩焼風の金襴錦手の人気に陰りが見えはじめ、士族の商法のおり事業の欠損が多くなり、明治 17 年（1884）に閉窯した。



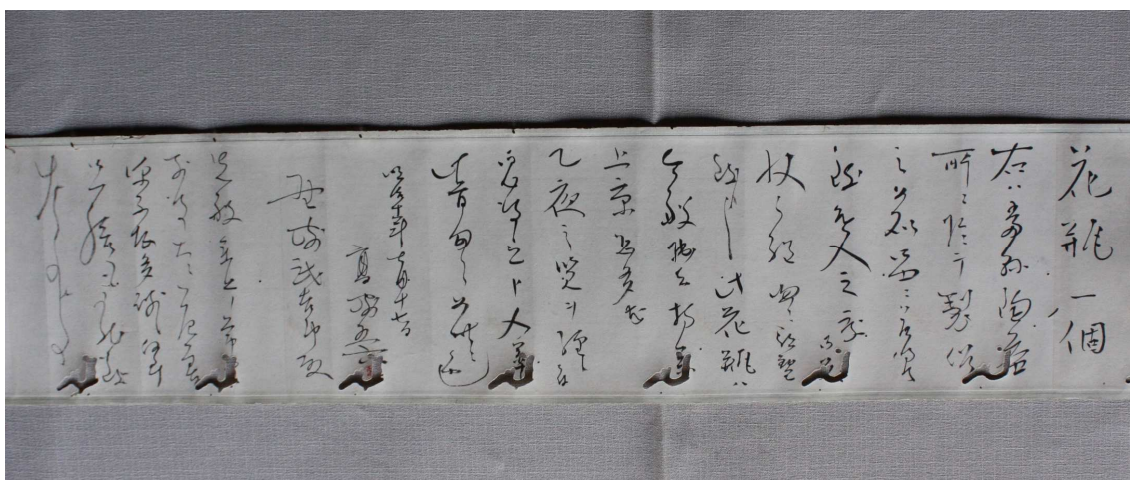
岡山旭焼（沈周石）

岡山旭焼の現存作品は非常に少なく、管見の限りでは、岡山県立博物館・当館の他、個人所蔵を含めても数点のみしか確認できていない。作品はいずれも本薩摩と同様に、貫入がある乳白色の素地に金彩や色絵で動植物などの文様を秀麗に施し豪華絢爛に仕上げている。色絵秋草文耳付花瓶（岡山県立博物館蔵）の胴部には「吉備岡山製 沈周石造之 湘江小生写」と銘文が記されている。また、金彩色絵花蝶文竹籠形花瓶（野崎家塩業歴史館蔵）の底には、「黄薇旭焼 沈周石造沈古城画」と銘があり、反時計回転の轆轤で成形されていること、製造者の



花瓶底 銘文

名前が沈であることから、まぎれもなく薩摩出身の陶工によってつくられたことがわかる。この花瓶の添状には、「花瓶一個 右ハ當縣陶器所ニ於テ制作之上名品ニ御座候得ハ 致進入之度御口収之段勿々期望致申候 此花瓶ハ今般拙者持参上京恐多尤乙夜之覽ヲ経候ニ付御心得候口申入兼口此旨勿々如此ニ候也 明治十年七月十七日 高崎五六（印） 野崎武吉郎殿」とあり、明治10年7月に高崎県令から野崎武吉郎へ贈られたことがわかる。この野崎武吉郎は製塩業と耕地経営の傍ら、岡山県の勸業掛・勸農掛を務め、高崎県令とも親しい交流があった。竹籠の彫刻は沈家一族の得意とした意匠と思われ、沈家伝世品収蔵庫所蔵の錦手牡丹菊図竹籠形浮彫花瓶や十二代沈壽官が製



花瓶の添状

作した菊浮彫香炉（宮内庁三の丸尚蔵館蔵）も菊花の下に竹籠の彫刻が施されている。

鹿児島県歴史資料センター黎明館の深港学芸員の御教示によると、沈周石の名は、鹿児島県日置市にある「戊辰役従軍記念碑」並びに「日置郡陶器同業組合開会決議録」（沈家文書）に確認できるという。すなわち、沈周石は鹿児島の人で明治元年の戊辰戦争に従軍し、明治9年から岡山の勸業試験場で勤務した後、明治36年（1903）頃は鹿児島で薩摩焼の製造に従事していた。この沈周石が製作した旭焼花瓶が、明治10年（1877）の第一回内国勸業博覧会に出品され、第2位にあたる風紋賞を受賞している。受賞理由は「質薩摩陶ニ均シク造致宜シ、聖土ハ県内ノ各所ニ於テ新ニ発見スル所、勸業場ニ従事シテ未ダ歳月ヲ経ズ、今此器ヲ出シタル奏功ノ速ナルヲ賞ス」とある。つまり、わずか1年足らずで県内の白土を発見し、薩摩焼同様の製品を製作し得たことが評価されている。しかし、同年の内国勸業博覧会委員会報告では「新薩摩ト称スル花瓶其他数種アリ、薩摩既ニ売レズ（中略）工人一層ノ工夫ヲ加ヘバ或イハ大ニ売ルルベキ品ヲ出サン、只趣向工夫ノ上ニ甚ダ注意ヲ要ス（中略）只一見ノ美ノミヲ以テ高価ヲ博セント欲スルハ大ナル誤ナルベシ」ともあり、既に薩摩焼とその模倣品の人気が低迷していたこともうかがえる。

このように明治維新後は藩閥政治がおこなわれ、無産士族の救済や輸出振興を図る際、その地域の県令や関係者の出身地が陶磁器製造に大きく影響を与えていることが見えてきた。

宮崎健司（野崎家塩業歴史館 学芸員）

#### 主な参考文献

岡山県史編纂委員会『岡山県史 第10巻 近代I』岡山県 1986

桂又三郎『日本やきもの集成9 山陽』平凡社 1981、p.110

『沈壽官窯友の会会報 清風』2012年